

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

カナダ移民と工野儀兵衛

和歌山県は、^{ひろしま}広島県などとともに^{いみん}移民の多い県として知られています。移民先は、おもにアメリカ・カナダ・ブラジル・オーストラリアの木曜島などです。なかでもカナダへの移民は日高地方からの出身者が一番多く、^{みお}たくさんの人が移民した^{たいしやう}三尾村(美浜町)は、大正時代ごろから「アメリカ村」ともよばれています。^{くのぎへい}工野儀兵衛は、その移民の^{せんかくしや}先覚者です。



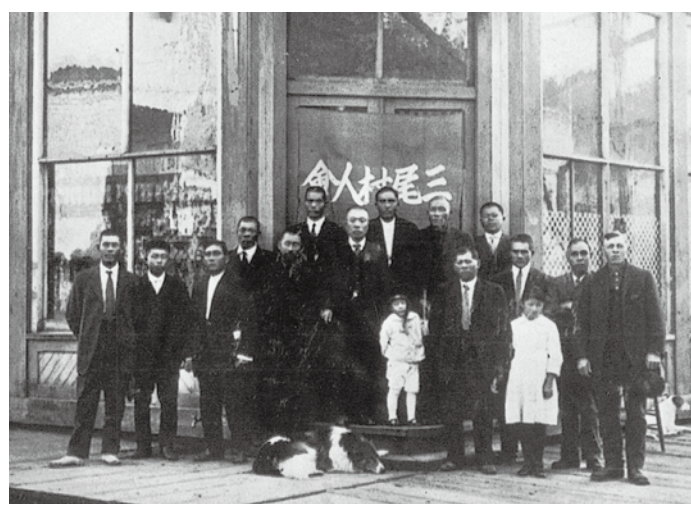
工野儀兵衛

カナダへ渡った工野儀兵衛

儀兵衛は、1854(安政元)年、^{だいく}大工であった^{しちべえ}工野七兵衛の長男として生まれ、家業を^つ継ぎました。19歳のときには^{でし}弟子をもち、工事を手がけるほどの^{しよくにん}職人になりました。かねがね村人の生活を守るために^{ていぼう}海岸に堤防を築く資金を得たいと考えていた彼は、活動の場を海外に求め、1人で家を飛び出しました。大工として働きながら、神戸へ移り、そして横浜に着いたのは1886(明治19)年でした。しばらくカナダへ渡るための情報を集めたのち、1888年9月にカナダのビクトリアに着きました。そしてスティブストンで漁業や農業をはじめました。儀兵衛は、近くの^{おどろ}フレーザー河にひしめく^{さけ}鮭の大群をみて驚きました。さっそく故郷の三尾の人々に「みんな来いよ、このリバー(川)では、サーモン(さけ)の上にサーモンが重なって泳いどる……」と手紙を書きました。

1889年、^{まね}儀兵衛の招きで弟の^{ちよきち}千代吉・^{いたろう}伊太郎および^{よしだかめ}吉田亀^{きち}吉ら数名がカナダに渡りました。それから毎年十数人以上の人が集団でカナダへ渡りました。1900年には「^{かなだみおそんじんかい}加奈陀三尾村人会」ができました。そのときの会員は150人でした。

事業で成功した儀兵衛は、貧しい人などを大事にする心が強く、ようやくカナダに渡ってきた村民の^{めんどう}面倒をよくみたといわれます。そして、1911年に三尾村へ帰り、1917(大正6)年、63歳でなくなりました。



加奈陀三尾村人会

カナダへの移民の数

年	計	男	女
1900	150		
1909	400	330	70
1914	507	357	150
1919	614	435	179
1924	620	428	192
1929	639	413	226
1934	720	471	249
1936	763	510	253

「加奈陀三尾村人会報」より

第二次世界大戦前の移民

カナダへの移民はしだいに増え、1940（昭和15）年には、カナダの三尾出身者は2千数百人にも達しました。第二次世界大戦前の漁業移民は、出かせぎで金をたくわえて、故郷へ送りました。そして家屋の新築などにもあてられたため、大正末から昭和のはじめにかけて、村の家屋はみちがえるようになりかわりました。

1931年、加奈陀三尾村人会は、儀兵衛の恩義に深く感謝し、その活躍をたたえるための頌徳碑を三尾湾に臨む県道のそばに建てました。

第二次世界大戦後の移民

1950年には、カナダへの渡航も再開され、第二次世界大戦中に帰国した約400人のうち大半の人々は再びカナダへ渡りました。「三尾加奈陀連絡協会」が設立され、カナダ東部のトロントなどへも移住しました。

カナダの美浜町出身の日系人は、ブリティッシュコロンビア州に約2,300人、東部に約2,700人の計約5,000人といわれています。

今の日系カナダ人は、実業界・公務員・医師・教員・弁護士などいろいろな分野で多くの人々が活躍しています。

移民をした理由

三尾村は、もともと耕地が少なく、風波の強い岩石海岸で漁業の発展もあまり望めない土地でした。また村民の海をおそれない心意気や、海産物を上方（京・大阪）に販売して生活を支えた敏感さと、開けた心が村を移民村にかえていったと考えられます。

こうした人々は、政府の援助を受けないで、自分の意志で自由の天地に出かけて行った移民らしい移民でした。そしてカナダ西海岸の鮭漁業の発展に大きく寄与したのです。

今、カナダ在住の日系人は、「出稼ぎ移民」（二重国籍）から「永久移住」（日系カナダ人）へとかわり、三尾は、「日系人のルーツ」として、日系カナダ人の訪問地となっています。



アメリカ村（美浜町三尾）